

跡の痕(二)

四五	四四	四三	四二	四一	四〇	三九	三八	三七	三六	三五	三四	三三	三二	三〇	二九	二八	二七	二六
伊勢塔世川	稲こぎ	桃花の春	山徑晚秋	鴨河晚景	郊外日暮	四條河原の夏	海邊に到る路	春の小川	茂林初秋	藤島武二	全	全	全	全	全	全	全	全
									上野公園東京美術學校									
水彩畫	全	全	全	全	全	全	全	全	水彩畫		全	全	全	全	全	全	全	全

六五	六四	六三	六二	六一	六〇	五九	五八	五七	五六	五五	五四	五三	五二	五一	五〇	四九	四八	四七	四六
廢寺	雨の翌日	ばつた取り	三條	夜前の雨	れんげ草	鴨川の初秋	祭禮の夜	東寺	布ざらし	夕立の前	東寺	日中	九月廿日	加茂の夏	小原女	出町の朝	音羽の瀧	東寺の夏	八阪の秋
																			安藤伸太郎
																			淺草區東三筋町十九番地
全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	油畫

跡の痕(二)

八三ノ二	八二	八一	八〇	七九	七八	七七	七七	七六	七五	七四	七三	七二	七一	七〇	六九	六八	六七	六六
少女	濱邊	箱根の湖	ゑぞ菊	野外	箱根の本陣	田舎路	小代 爲重	後園	佛花	平野の夕景	河岸の舟	栗莉	小林 萬吾	出町の初秋	新しき宮	うたゝね	清水	春暖
							麻布區我善坊町 二十一番地						芝區今入町十七番地 境屋方					
全	全	全	全	全	全	油		全	全	全	全	油	全	全	全	全	全	全
						畫						畫						

一〇〇	九九	九八	九七	九六	九五	九四	九三	九二	九一	九〇	八九	八八	八七	八六	八五	八四	八三ノ二
濱邊の月	虹	麥の秋	和 田 英 作	肖像	夏日の村舎	果園の春	雨後の牧野	夏の村落	林間の水	全村寺内部	全ムズ河流	佛國ムズ平原	濱邊の枯草	農家	澎湖島上陸	山家	少女
			芝區愛宕町二丁目 十四番地										麴町區元園町二丁目 二十七番地				
全	全	油		全	全	全	全	全	全	全	全	油	全	全	全	全	全
		畫										畫					

蹄の痕(二)

二〇一	稲村	全
二〇二	漁村	全
二〇三	橋畔の柳樹	全
二〇四	春雨	全
二〇五	大道の雨	全
二〇六	矢口のわたし	全
二〇七	霧雨	全
二〇八	鳴立澤	全
二〇九	落葉搔	全
二一〇	大磯の濱邊	全
二一一	玉川の落暉	全
二一二	濱邊の砂原	全
二一三	猫兒	全
二一四	田圃の夕陽	全
二一五	月の出	全
二一六	菜の花	全
二一七	白瀧幾之助	油
二一八	うるさし	全
二一九	矢口渡頭	全
二二〇	田甫の夕陽	全
二二〇	橋畔の春色	全

芝區愛宕町二丁目
十四番地磯谷方

二二一	邊籬花卉	全
二二二	品海の片舟	全
二二三	打寄する波	全
二二四	穩なる水	全
二二五	額縁師	全
二二六	あれ後のきび畑	全
二二七	散歩	油
二二八	菊園	全
二二九	山寺	全
二三〇	箱根宿	全
二三一	京女	全
二三二	鴨川の雪	全
二三三	少女	全
二三四	海濱の月	全
二三五	しけ	全
二三六	海上の月の出	全
二三七	箱根雙た子山	全
二三八	寄せ來る波	全
二三九	高野河原の春	全
二四〇	河原の春雨	油

黒田清輝

跡の痕(二)

一四一	四月頃の田舎	全
一四二	通り雨	全
一四三	海邊のながめ	全
一四四	大磯花水川の川口	全
一四五	風ある日の波	全
一四六	箱根の湖水	全
一四七	函根の宿屋	全
一四八	大磯嶋立庵	全
一四九	夏の庭	全
一五〇	松林	全
一五一	大磯海水浴場	全
一五二	大磯のくろんぼう	全
一五三	樺山伯肖像	全
一五四	衆議院書記官長肖像	全
一五五	波打際の岩	全
岡田三郎助 <small>麻布區新堀町 七番地</small>		
一五六	夕日	油
一五七	澁谷の夕景	全
一五八	春の野邊	全
一五九	麥わら細工	全
一六〇	風雨	全

一六一	朝	全
一六二	花水川	全
一六三	田作	全
一六四	少女の像	全
一六五	ゆるぎの濱砂原	全
一六六	浪と岩	全
一六七	浪	全
一六八	しぎたつ澤	全
一六九	大磯海水場	全
一七〇	根岸の浦	全
一七一	ゆるぎの濱晚暉	全
一七二	やせたる麥畑	全
一七三	小磯の濱	全
一七四	ゆるぎの濱夕暮	全
一七五	甘酒屋	全
一七六	小金井	全
一七七	秋のなかば	全
湯淺一郎 <small>赤坂區榎木阪町 五番地</small>		
一七八	興津漁村	油
一七九	清見寺	全
一八〇	観音寺	全

蹄の痕(二)

一八一 全 海水浴場
 一八二 全 三保松原
 一八三 全 逗子の濱
 一八四 全 逗子の浪
 一八五 全 芝浦暮雲
 一八六 全 佃島夕陽
 一八七 全 小金井村初秋
 一八八 全 品海の暮色
 一八九 全 日比谷晚景

中村勝治郎 京都市富小路
御池南人

一九〇 全 白川の景
 一九一 全 荒寺の秋

佐野 昭 麻布區狸六町
三十五番地

一九二 第六師團戰勝 正面十
 一九三 紀念碑圖案 五分一
 一九四 全全切斷面十五分一
 一九五 全全平面二十分一
 一九六 全額縁飾及臺 二分一
 全 石操形模様 二分一
 全 可美眞手命像

全 建築下圖
 全 石膏製

合田 清 赤坂區溜池町
三番地

一九七 全 日の暮
 一九八 全 林下の泉
 一九九 全 故有栖川大將宮殿下
 二〇〇 全 應舉筆 龍
 二〇一 全 鷹
 二〇二 全 狙仙筆 猿
 二〇三 全 容齋筆 菊池武時

今泉秀太郎 芝區三田豐岡町
六十五番地

二〇四 全 未來の浮世
 長原孝太郎 本郷區駒込千駄木町
百七十七番地

二〇五 全 森川町遠望
 二〇六 全 牛屋
 二〇七 全 燒芋屋
 二〇八 全 車夫

菊地鑄太郎 赤坂區溜池町
三番地

二〇九 全 久米民之助氏之像

全 木版彫刻
 全 狂 畫
 全 水彩 畫
 全 狂 畫
 全 銅 製

○

十月三十一日 神田金清樓及び鳥屋にて騒ぐ。

十一月十三日 山王山楠本に會し會歌を作る、來會者十一人、乙羽、高島、菊地、岩村、安藤、佐野、合田、小代、和田、黒田、赤天。

十一月二十九日 展覽會閉會。

十一月二十二日 佐野、安藤、黒田の三名京都へ行く。

十一月二十八日 岡田京都に着す。

十二月三日 佐野京都を去る。

十二月四日 岡田奈良へ向け京都を發す、同七日頃より奈良に於てインフレエンザの犯す所となり、後チブスに變症し、二十日前後京都山田病院に入院せり。

十二月十一日 安藤、黒田歸東。

十二月十二日 目黒久米邸に會合す、小代、岩村、菊地、和田、黒田及び主人の六名なり、一泊す。翌十三日、藤島、合田來り合し、池上、矢口等を経て川崎へ下り、晚食後九時過歸京。

十二月二十六日 午後二時久米、小代、黒田の三名本所驛を發し九十九里に向ふ。同二十八日九十九里四天木高砂屋を發し南下して上總大原竹屋九兵衛方に着す。佐野空しく一行の跡を追ふ。

○ 京都中村勝治郎より東京黒田清輝宛

(十二月二十一日)

一昨日より一寸伊賀地方より奈良を経て旅行いたし昨夜歸京致候序に奈良なる岡田子を訪問した同子は奈良へ行きしより三日後劇しきインフルエンザに冒され居申候この事は一寸聞及びたる故不敢取敢手紙にて聞合せたるも返事なし(實は心元なく思ひ居たり)其返事なきも尤もにて一時は人事不省に陥り筆を執ると出來ざりしとの事にて

今も尙逆上して普通の談話すら聞き取り難き有様に候百里の孤客斯る病魔に罹り一室に呻吟せるは轉々同情の感に堪へず同子も予の訪問を受け甚く驚喜の状に有之候昨夜は匆々にして辭したるも旅宿(對山樓)へは萬事の注意を懇頼し置き候尙予は再應同地へ赴くの精神なり

幸にして病氣は治癒に向ひつゝあり此上は大丈夫なれども衰弱は甚だしき様に見受けたり是等の事は東京なる同子の家族達も未だ承知なき事と存候

○東京黒田清輝より京都中村勝治郎宛

(十二月二十四日)

岡田の病氣の事は今日和田から聞き又君の手紙で詳しく分つた實に驚た次第だ先日岡田と一緒に居る人から手紙をよこし岡田は少し風を引て居ると云て來たが歌などが書いて有つたりして愉快らしい文句だつたから風の方のことは少しも氣にせずに居た其後一向文通もなかつたがもう歸つて來る頃だと思つて返事も出さずに置た大病とは氣の毒千萬旅の事だからさぞ不自由だろうと思ふ和田の話に奈良から電信が來て岡田の内の人立つて往つたと云ふことだからまあ安心だ

○東京黒田清輝より京都中村勝治郎宛

(十二月二十五日夜)


奈良の方へ電信をかけて岡田の様子を問ひ合せたらもう出立したとの事だつた處が今晚白瀧から岡田が京都まで來て病院に入つたと云ふ事を知らせたそうして見ると未だなか／＼方ぢやない實に困つた話だ奈良の宿屋では何分不自由で仕方が無かつたゞらう君見舞に行つたら宜しく云つて呉れ
僕等はいよく明日九十九里の方へ出かける

和田藤島小林などは矢口の渡の邊に陣どる

これから十日間計は一と勉強だ僕等の連中は小代と久米だことによつたら佐野も一緒に来るだらう安藤も少し後れて来る筈だ

○東京佐野昭より上總大原驛滞在會員宛

十二月二十八日夜

例之通り菊地の二階に集合した、明日一番で出發する、君等はどうだとすゝめたら皆んな不同意であつた。其後四人で日蔭町迄買物に出掛けた、此様な帽子を滑と榮翁と二人で買ふた。

十圓ほんれエでつりをよこせと榮翁が

いばつた時の面がみせたい。

古本をうかとねをつけまけられて閉口した。

あくれば二十九日午前七時

東三筋町にて

佐野

「九時の汽車で行くのだが君はどうだ。もう二十分ほかないが間に合ふだらうか。大網の清宮で分るか、其後手紙はこぬか？」

安藤

「おれはあしたの晩でなければゆかれぬ、二十分あれば間に合ふ、早く行け。兎に角清宮へ行けばいつた先がしれる、行く先々を云ひ残して行く筈だ。ねむい〜」

本所にいそいで汽車が間に合つた

來て見れば晝になりさうな場所もなし

いらつしやいさあこちらへと案内し

此家が宿屋であるかと車夫に問ひ

四天木で第一等と車夫はいふ

お江戸から客はこぬかと問ふたれば

きのふお立ちとか、あ引込む

宿屋の女房「アー誠にお氣の毒さんですよ、此處に居るつてネー昨日わしが同道して家まで借る約定をしたですが、それ急に勝浦が方へゆきましたよ、それもネー夜ふかしして朝九時過ぎまでねて居て、車屋どん來てから起きたです、なにしろ勝浦まで十四里あるからネ、ついた處が一ノ宮位が關の山サ。

目ざす敵勝浦と註進で腰がぬけ

まだあるがあまり長いから又來年 十二月三十日夜認む

○東京黒田清輝より京都中村勝治郎宛

恭賀新年

(明治三十年一月十四日)

京都の新年はどうだ僕等は久米小代と三人連で上總へ行って面白く歳を取つた上總の海邊の風俗は實に不思議だ

景色も随分話せる僕丈でも畫が十二三枚出來た

岡田が山田病院に居て餘程悪いそうだから見舞に行つてやつて呉れ學校の方の事は一切心配は無用だと云つて呉れ約束の畫(君のも一緒に)を磯谷から堀江君へ宛て出したが受取つたとも何とも云てよこさない聞合せて見て呉れ千枚漬は直に送つて呉れて母が喜んで居るありがたう

○京都中村勝治郎より東京黒田清輝宛

(二月十六日夜)

上總旅行は中々面白かりしとの事其地の光景は兄の畫筆によりて世間に紹介さるゝならむ小生はこれを見るの日にこれを樂む

過日貴兄の案内により畫を送られしとの事其後指折り數へて待ち居りしに一昨日松華君來訪して右畫は拾數日前受取り其後同君の手許に預り置きしとの事にて早速受取りに參り慥に貴兄の畫二面及岡田、和田二氏の分各一面小生の分二面と繪具箱一個正に受取り申候

岡田氏の病氣に付ての様子及山田病院に入院せしめし顛末は書面に認むるも甚だ煩雜ゆゑ今日まで通報せざりし其次第は數日前歸東せし矢崎氏より白瀧氏が和田氏へ委敷談話するとの約束故右兩人の中より既に聞及ばれたる事と遠察いたし居候今夕も見舞に參り候處格別の異狀なきも數日前には著しき變狀を來し(そは下血して熱度非常に沈降せしなり)自今一週間内に再度右變狀を來たす様の事あれば或は我會の一良を失ふやも計り難き有様なりされども先づ今日にては其憂これなき見込ゆゑ(醫師の言)兎に角御安神あれ御書面の旨懇々相傳へたるに病人は微笑を含んで相喜び居申候小生は不及ながら充分助力致居候間何卒其邊は御安神給はり度候

此頃京都近郊の景色は昨年貴兄と大津旅行(二月の初旬なりし)せし時と其様子相同じく(京都は此頃は大に暖氣)
何だか其時の事を追懷して妙な感じを惹き起すなり 頓首

○

卅年 三月二十日頃 岡田病癒えて歸東す。

同 四月十七日 岡田佛國留學の送別を兼ね、柳光亭にて花見の宴を開く、會員外の來會者は杉五一君、坪谷善四郎君、松波正信君の三名。

『光風』二十四明治三八年二月、